

昔むかし。

お母さんが、パンを焼やきました。お母さんは、女の子にいました。

「さあ、このあつあつのパンとミルクを、おばあちゃんの所へとどけておくれ」

女の子は出かけました。すると、四つ辻つじの所でオオカミ男に会いました。

「おい、どこへ行くんだ」

「あつあつのパンとミルクをとどけに、おばあちゃんの所へ」

「どの道を行くんだ？縫ぬい針はりの道か、留とめ針の道か」

「縫い針の道」と、女の子は答こたえました。

「そうかい、じゃあ、おれは、留め針の道だ」

女の子は、縫い針を集めてよろこんでいましたが、そのあいだに、オオカミ男は、おばあちゃんの家に着いて、おばあちゃんを殺ころしてしまいました。そして、肉にくは戸棚とだなにしまい、血ちはびんに入れて棚たなの上に置おきました。

やがて、女の子がやって来て戸をたたきました。オオカミ男は、

「押おしたらあくよ。ぬれたわら一本でとめてあるだけだから」といいました。

女の子は、入って来ると、

「こんにちは、おばあちゃん。あつあつのパンとミルクを持もってきたわ」といいました。オオカミ男は、

「ありがとう。戸棚にしまっておくれ。中に肉が入っているから、それを食べて、棚上のワインもお飲のみ」といいました。

女の子が、食べたり飲んだりしていると、そばにいた子ねこがいました。

「うえーっ！自分のおばあちゃんの肉をたべて、血を飲ねんでしまったよ。こわい姉ねえちゃんだねえ」

オオカミ男は、

「さあ、おまえ、服ふくをぬいで、ベッドに来て横よこになるんだよ」といいました。

「ぬいだエプロン、どこへ置おこうかしら」

「火にくべてしまおうといいよ。もうおまえにはいらなからね」

そこで、女の子は、エプロンをだんろの火に投げこみました。それから、

「ねえ、ぬいだチョッキは、どこへ置こうかしら」とききました。

「火にくべてしまうといいよ。もうおまえにはいらないからね」

女の子は、チョッキをだんろの火に投げこみました。

「ねえ、ぬいだワンピース、どこに置こうかしら」

「火にくべてしまうといいよ。もうおまえにはいらないからね」

女の子は、ワンピースをだんろの火に投げこみました。

「ねえ、ぬいだペチコート、どこに置こうかしら」

「火にくべてしまうといいよ。もうおまえにはいらないからね」

女の子は、ペチコートをだんろの火に投げこみました。

「ねえ、ぬいだ長くつした、どこに置こうかしら」

「火にくべてしまうといいよ。もうおまえにはいらないからね」

女の子はすっかりはだかになると、ベッドに入っていました。

「あれ、おばあちゃんって、毛深いのね」

「このほうがあたたかいんだよ、おまえ」

「あれ、おばあちゃんのつめって、おおきいのね」

「このほうが、からだをかくのにいいんだよ、おまえ」

「あれ、おばあちゃんの肩^{かた}って、おおきいのね」

「このほうが、まきを運ぶ^{はこ}のにいいんだよ、おまえ」

「あれ、おばあちゃんの耳^{みみ}って、大きいのね」

「このほうが、おまえの声がよく聞こえるんだよ」

「あれ、おばあちゃんの鼻^{はな}の穴^{あな}って、大きいのね」

「このほうが、たばこをかくのにいいんだよ、おまえ」

「あれ、おばあちゃんの口^{くち}って、大きいのね」

「このほうが、おまえを食べるのにいいんだよ」

「あれ、おばあちゃん、あたし、おしっこしたくなっちゃった。外へ行かせて」

「ベッドですればいいじゃないか」

「だめよ、おばあちゃん。外へ行きたいよ」

「わかったよ。だけど、さっさとするんだよ」

オオカミ男は、女の子の足にひもをくりつけて、外へ出してやりました。

女の子は、外へ出ると、ひもをほどいて、庭のスモモの木に結びつけました。

女の子がなかなかもどつて来ないので、オオカミ男はいらいらしていました。

「おまえ、うんこなのかい。うんこをしてるのかい」

けれども返事^{へんじ}がありません。オオカミ男はあわててベッドを飛びだしました。けれども、

女の子はいません。オオカミ男は、急いで後を追^おいかけました。ちやうどオオカミ男が追いついたそのとき、女の子は家の中に逃げこんでしまいましたとき。

村上郁再話

資料『赤頭巾ちゃんは森を抜けて』ジャック・ザイプス／兼岡糸子、横川寿美子、吉田純子
訳／阿畔社